

薬害 HIV 感染患者のメンタルヘルスの支援に関する研究

研究分担者

木村 聡太 国立健康危機管理研究機構 国立国際医療センター
エイズ治療・研究開発センター

研究協力者

大友 健 国立国際医療センター エイズ治療・研究開発センター

小松 賢亮 和光大学、国立国際医療センター エイズ治療・研究開発センター

加藤 温 国立国際医療センター 精神科

研究要旨

支援者が抱える支援の課題を解決していくこと（支援者支援）は、要支援者の適切な支援につながる。本研究は、薬害 HIV 感染者とその家族を支援する心理職に対して、支援における困難さなどを聴取し、支援者を支援することで薬害 HIV 感染者とその家族の支援に資することを目的として実施する。

また、長期療養におけるメンタルヘルス支援のために、看護職と心理職の協働に関するセミナーならびに、MSW と心理職の協働に関するシンポジウムを開催した。

【研究 I】

「薬害 HIV 感染者とその家族のメンタルヘルスを支援する心理職に対する支援に関する実態調査」の実施

A. 研究目的

HIV 感染症ならびに血友病の治療の進歩により、薬害 HIV 感染者の身体的な予後が確立されて久しい一方で、メンタルヘルスへの支援は長期療養時代の新たな課題となっている。

そうした長期療養時代を迎える中で、薬害 HIV 感染者のメンタルヘルスを支える心理職への支援（以下、支援者支援）も重要であると考えられる。特に過去の薬害被害から医療不信やトラウマを抱える薬害 HIV 感染者への支援や、精神疾患を有している場合その症状（例えば、妄想や心気症状など）により関わりに困難さなどを感じる場合も考えられる。また、薬害 HIV 感染者を身近に支えるその家族への支援も求められているところである。

藤澤ら（2023）は、「支援者への支援は、職務特

性からも必要であり、支援者への適切な支援は支援の質を向上させることが従来から指摘され、「支援者支援」としての取り組みは、広い領域において様々な形で実践されている」と、支援者に対する支援が要支援者らの適切な支援となると述べている。

一方で、和文英文ともに支援者支援に関する文献の多くは、地震などの自然災害や COVID-19 の世界的な流行など、いわゆる“有事”での支援者支援に関するものであり、とりわけ薬害 HIV 感染者の支援者を対象にした支援者支援の報告は見られていない。

本研究では、薬害 HIV 感染者（およびその家族）を支援する心理職への支援の充実をはかるため、支援についての課題を収集しその実態を調査することを目的とする。

本研究は、薬害 HIV 感染者のメンタルヘルスを支える支援者への適切な支援を考える礎となり、間接的に薬害 HIV 感染者およびその家族自身の支援に資することができると考える。

B. 研究方法

薬害 HIV 感染者のメンタルヘルスを支援しているエイズ治療ブロック拠点病院に勤務する心理職に対して、支援の課題ならびに対処法、今後求める支援などの実態を調査するため、横断的にインタビュー調査を実施する。

説明同意文書を用いて研究対象者らに研究概要について説明ののち、同意取得者できた参加者へインタビューを行う。インタビュー内容は、計量テキスト分析を用いて解析を行う。

C. 研究結果

現在、7施設16名から同意を取得した。

D. 考察

該当しない。

E. 結論

同意を取得できた方々のインタビュー調査を実施していく。

【研究Ⅱ-i】

「令和7年度全国のHIV診療に携わる看護職と心理職の相互交流セミナー」の開催

研究協力者：

大金 美和（国立国際医療センター
エイズ治療・研究開発センター）

杉野 祐子（国立国際医療センター
エイズ治療・研究開発センター）

東 政美（大阪医療センター 看護部）

安尾 利彦（大阪医療センター 臨床心理室）

大杉 福子（国立国際医療センター
エイズ治療・研究開発センター）

A. 研究目的

HIV 感染症はその治療の進歩により長期療養が可能な時代となり、高齢化や合併症のコントロールといった新たな課題も増えている。合併症には様々あるが、メンタルヘルスの支援も含まれている。HIV 感染症患者をとりまくメンタルヘルスの課題は、精神疾患をはじめ服薬・闘病疲れやセクシュアリティによる生きづらさ、HIV に対する差別・偏見など多岐にわたり、その支援が適切な HIV 治療に関わっていくため、多職種による協働や支援の実践を学び、深めることが必要とされている。

そのため、メンタルヘルスの不調を抱えた HIV 陽性者への支援を振り返り、看護職と心理職のそれぞれの役割に基づいた協働と支援を学ぶ機会として、「HIV 感染症の医療体制整備に関する研究」（分担研究：ブロック内中核拠点病院間における相互交流による HIV 診療環境の相互評価と MSW と協働による要介護・要支援者に対する療養支援のネットワーク構築）が主催する“令和7年度 全国の HIV 診療に携わる看護職と心理職の相互交流セミナー メンタルヘル스에課題のある HIV 陽性者に対する看護職と心理職が協働する支援とは Vol.3”を「HIV 感染症の医療体制整備に関する研究」の共催として開催した。

今回は初診時からのメンタルヘルスに関するアセスメントのポイントについての講義と、服薬アドヒアランス不良の HIV 陽性者を支える看護職と心理職の協働事例から、メンタルヘルスへの理解を深めることを目的とした（図1）。

B. 研究方法

全国の HIV 診療に携わる看護職と心理職を対象に、2025 年 11 月 7 日にオンラインにてセミナーを開催し、事後にセミナーに関するアンケートを行った。なお、申込時のアンケートと事後のアンケートにて看護職と心理職の協働についてのイメージが持てるかを尋ねており、その点についてはセミナー前後での比較を行った。

C. 研究結果

参加者は 108 名であった。セミナー実施後のアンケートは、92 件の回答があり、その結果について報告する（回収率は 85%）。

職種については約 60%が看護職であった（図 2）。勤務地としては、関東甲信越ブロックからの参加が最多（図 3）で、勤務先の機関としては約 80%がエイズ治療拠点病院であった（図 4）。4 割ほどの回答者が HIV 陽性者への支援について 5 年以上の経験を

令和7年度 全国のHIV診療に携わる看護職と心理職の相互交流セミナー
メンタルヘルスに課題のあるHIV陽性者に対する看護職と心理職が協働する支援とは Vol.3

HIV感染症は長期療養が可能な時代となり、高齢化や合併症のコントロール、メンタルヘルスなど新たな課題も増えています。HIV陽性者をとりまくメンタルヘルスの課題は、精神疾患をはじめ服薬・闘病疲れやセクシュアリティによる生きづらさ、HIVに対する差別・偏見など多岐にわたり、HIV治療や療養に影響を及ぼします。本会は、メンタルヘルスの課題をもつHIV陽性者の支援について振り返り、看護職と心理職のそれぞれの役割に基づいた協働と支援について学ぶことを目的としています。

日時：**2025年11月14日（金）** 参加費は無料です
 18：00 - 19：30 *入室17:45
 対象：HIV陽性者の支援に携わっている看護職・心理職
 形式：Zoomミーティング
 参加申込〆切：2025年11月7日（金）23:59 【申込QRコード】
 申込URL：<https://forms.office.com/r/M3h8vBTpAe>
 *本セミナーは日本エイズ学会認定制度の教育研修単位申請中です。

教育講演
HIV陽性者の初診時からのメンタルヘルスに関する看護職と心理職のアセスメントと連携のポイント
 -国立病院機構 大阪医療センター
 看護部 東 政美（副看護師長）
 臨床心理室 安尾 利彦（主任心理療法士）

事例
葛藤する治療意欲に寄り添いながら、自律的な治療参加を支える支援
 -国立健康危機管理研究機構 国立国際医療センター
 エイズ治療・研究開発センター
 大杉 福子（薬害専従コーディネーター）
 木村 聡太（心理療法士）

総合討論
医療不信のあるHIV陽性者に対する患者参加型医療の取り組みとは

【問い合わせ先】
 国立国際医療センター エイズ治療・研究開発センター
 セミナー事務局 長島・片平
 TEL：03-3202-7181（代表）
 e-mail：hiv-hospital-info@jihs.go.jp

◆主催：令和7年度厚生労働省行政評価局医療政策推進費補助金エイズ対策研究事業「HIV感染症の医療体制整備に関する研究」（助成機関：国立国際医療センター）分科研究「ブロック内中核拠点病院間における相互連携によるHIV陽性者の生活の質とHIVと協働による患者・要介護者に対する療養支援のネットワーク構築」（大会実行：国立国際医療センター）
 ◆共催：令和7年度厚生労働省行政評価局医療政策推進費補助金エイズ対策研究事業「患者参加型医療の構築に関する研究」（分科研究：国立国際医療センター）
 ◆協賛：令和7年度厚生労働省行政評価局医療政策推進費補助金エイズ対策研究事業「患者参加型医療の構築に関する研究」（分科研究：国立国際医療センター）



図 1 セミナーフライヤー



図 2 参加職種

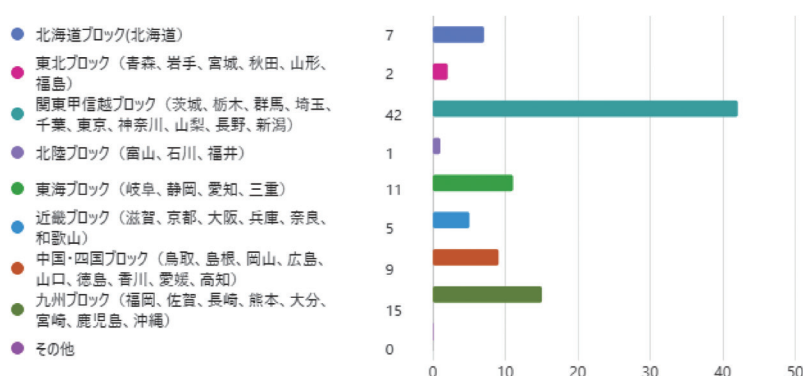


図 3 勤務地

有しており（図5）、おおよその担当症例数でみると“10例以上50例未満”が28%で最多であった（図6）。

看護職と心理職の協働するメンタルヘルスの支援について、セミナー前後でイメージの比較を行ったところ、いずれの項目においてもt検定にて有意な差がみられた（ $p<.05$ ）（図7）。

セミナーの内容については、教育講演と事例はともに90%以上が「良かった」と回答し、また開催形式などにおいても90%以上が「良かった」と回答した（図8）。

自由記述にてセミナーの感想等も収収しており、その結果は表1に示した。また今後企画してほしい内容については表2に示した。

D. 考察

参加者の8割はエイズ治療拠点病院に所属し、日ごろからHIV陽性者の支援に携わっていた。看護職と心理職ともに参加がみられ、経験年数および担当症例数においても様々な年数・症例数からの参加がみられた。

セミナーの前後での支援イメージの比較からも、セミナーを受けてメンタルヘルスについての知見を得られたと考えられ、セミナー全体の評価についても9割ほどが良いと回答しており、参加者にとって有益な会であったことが示唆された。

E. 結論

引き続き、HIV陽性者へのメンタルヘルスの支援および、多職種協働に関するセミナーや研修会を開催していくことが必要と考えられる。

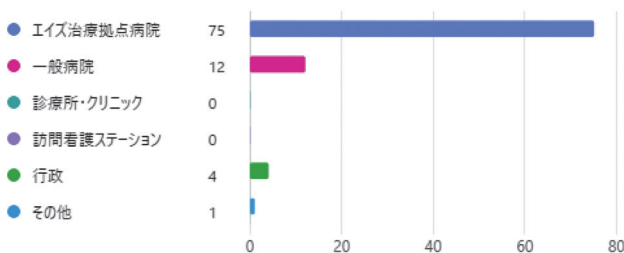


図4 勤務先機関

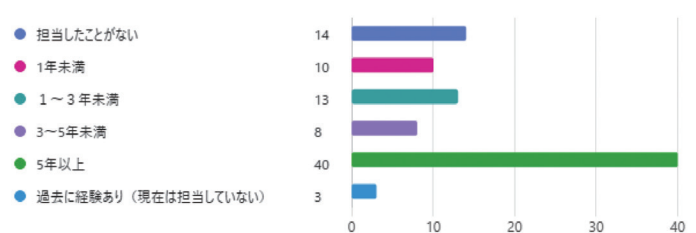


図5 支援経験

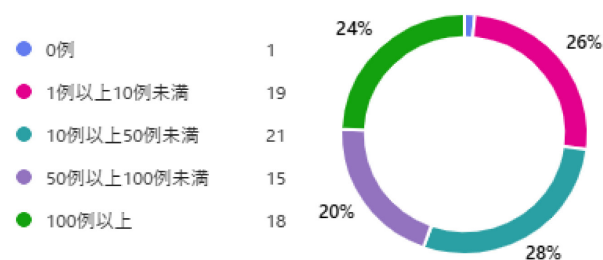


図6 担当症例数

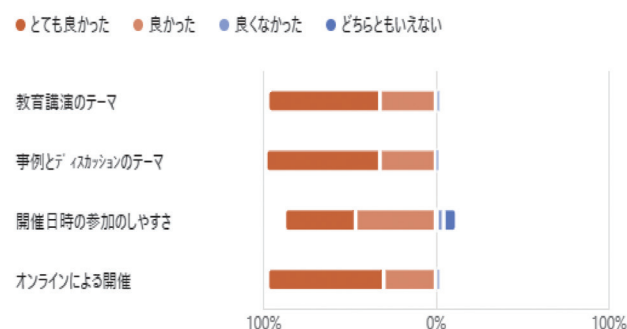


図8 セミナーの評価

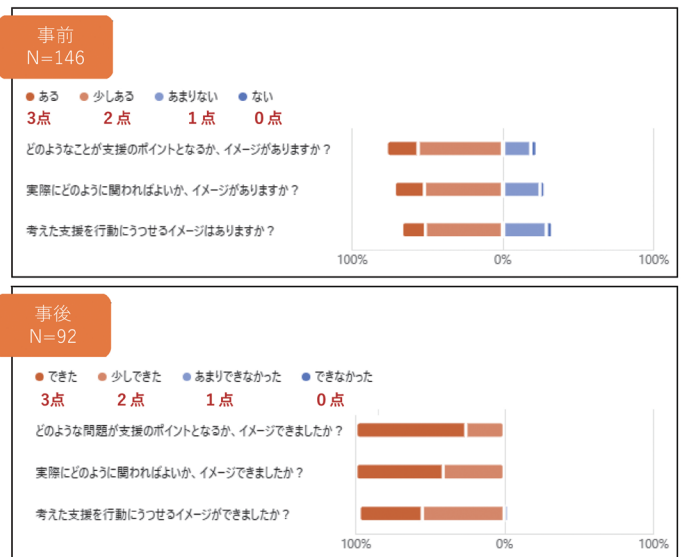


図7 看護職と心理職の協働するメンタルヘルスの支援についてのイメージ

表 1 支援イメージの自由記載

看護職と心理職の協働するメンタルヘルスの支援について、どのような支援のイメージをもつことができましたか？-抜粋
それぞれの視点でのアセスメントした課題や問題を共に共有し、患者にとってよりよい療養につながるように共に目標と支援を検討して実施していくこと
早期からアセスメントしアセスメントしたものを互いに共有する
それぞれの役割を理解することが重要。その上で、看護職の視点から、何がなぜ気になったのか、どのような支援を期待しているのかを心理職の方に伝えることが必要だと考えた。
看護師は全体を把握するだけでなく、多職種へつなぐという支援が重要だと理解しました。そこからつながった心理職等はあらたな課題等に気づいた際の共有が大切になるとイメージをしました。
我々は、外部の機関から派遣されていく立場ですが、コーディネーター役の看護師や医師が、心理師の役割をイメージ出来る方とは連携しやすい印象があるため、心理師側としても、看護師のニーズがどこにあるのかを探りながら関わっていくことの重要性を感じながらお話を伺いました。
つまり、質問項目への回答としては、「お互いの守備範囲を理解し合った上で、情報共有を適宜行いながら、呼応型でタッグを組む方が良い」というイメージを持ちました。
看護師が患者の状況をキャッチし、その中で患者のアセスメントを行いながら、患者の同意を得て心理職につなぎ、協同して精神的なフォローアップをしていくこと。看護師の力量も試されるため、初診時に患者に心理職に会っておくと、心理職との面談について精神的なハードルが下がるように思う。
これまでの連携では、CNから紹介のあった患者さんでカウンセリングにつながった方を情報共有・検討することが多かった。セミナーに参加して、カウンセリングにつながる前から双方向にアセスメントの検討や情報共有するなどの日々の臨床のなかでの細かな協働が必要だと感じられた。

表 2 セミナーへの感想や今後の企画についての自由記載

セミナーへの感想やご意見、今後企画してほしい内容がございましたらご記入ください。-抜粋
発達特性がある患者さん、コミュニケーションが取りづらい患者さんについてのケースを取り扱っていただけると良いなと思いました。
本日もあったように、薬害エイズの方へのサポートを取り上げてくださったら嬉しいです。
薬害患者については定期的に行ってほしいです
大阪や東京の大規模施設のイメージでない、50人以下の拠点病院での支援についてどのようにしているのか
母子感染の子どもへの告知に向けた支援の方向性について
HIV薬害被害者のケアの初診時からのメンタルヘルスに関する看護職と心理職のアセスメントと連携のポイントについてはとても参考になりました。どうもありがとうございました。
貴重なご講演、症例のご発表をありがとうございました。「心理支援」を受けることに抵抗のある方は多くおられますが、何かのきっかけで心理士とつながることができ、少しでもその抵抗が和らいで、身体と同じくらい心のケアの必要性を感じていただけるよう支援をしていきたいと感じました。ありがとうございました。
この度は大変貴重な会を企画していただき、ありがとうございました。とても勉強になりました。もし可能であれば勤務時間内の開催もしくはオンデマンドでも見ることができるとより参加しやすくなるかなと思いました。
できれば、資料が欲しいです。大切なお話をされているので、手元に資料を残しておきたいと感じました。
開催時間が遅すぎる。もっと早く始めて早く終わってほしい。

【研究Ⅱ - ii】

「第2回 HIV 感染症患者の療養支援に関する心理職とMSWの協働シンポジウム」の開催

研究協力者：

三嶋 一輝（福井大学医学部附属病院）
高野 公輔（明治学院大学心理学部 専任講師）
青野加奈子（石川県立中央病院）
越野 紗矢（石川県立中央病院）
高村 佳幸（順天堂医院）
高橋 昌也（国立国際医療センター）
葛田 衣重（千葉大学医学部附属病院）
栗田 智未（福井大学医学部附属病院）

A. 研究目的

HIV 感染症患者の長期療養を支えるため、全国のエイズ治療拠点病院は地域連携を推進している。エイズ予防指針はチーム医療の重要性を強調しており、HIV 診療チームの心理職、医療ソーシャルワーカーは、両職種の連携力を強化し、心理・社会的な支援の包括的な支援体制を構築する必要がある。

そのため、エイズ治療拠点病院の心理職と医療ソーシャルワーカーの連携・協働について、「HIV 感染症の医療体制に関する研究」（分担研究：Ns との協働による要介護・要支援者に対する療養支援のネットワーク構築）が主催する“第2回 HIV 感染症患者の療養支援に関する心理職とMSWの協働シンポジウム”の協力として開催した。

内容としては、チーム医療に関する講演と HIV 陽性者の事例から討論を行い HIV 陽性者への医療ソーシャルワーカーと心理職の協働支援についての理解を深めることとした（図9）。

B. 研究方法

全国の HIV 診療に携わる MSW と心理職を対象に、2025 年 12 月 18 日にオンラインにてセミナーを開催し、事後にセミナーに関するアンケートを行った。

C. 研究結果

参加者は 167 名であった。セミナー実施後のアンケートは、147 件の回答があり、その結果について報告する（回収率は 88%）。

職種については約 50% が MSW であった（図 10）。勤務地としては、33% が関東甲信越ブロック

で（図 11）、勤務先の機関としては 89% が医療機関であった（図 12）。76% の回答者が現在 HIV 陽性者

図 9

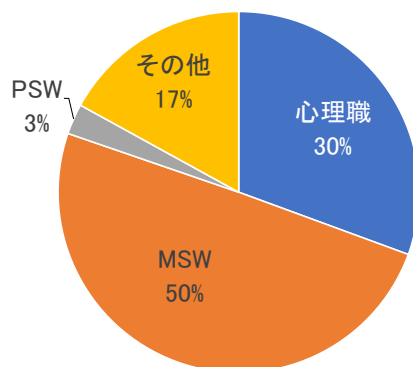


図 10 参加職種

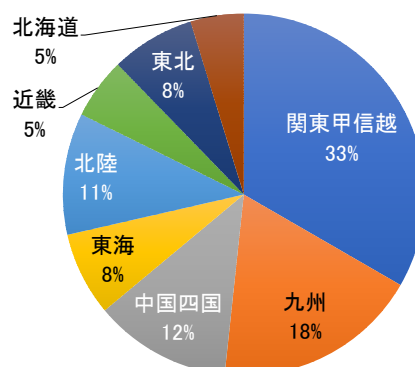


図 11 勤務地

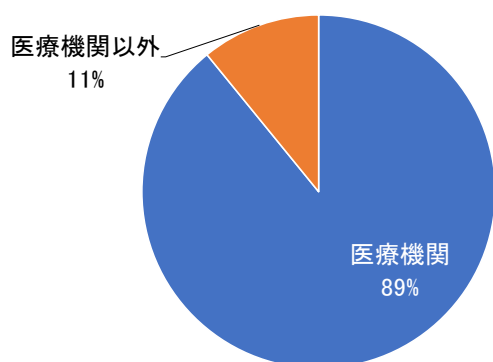


図 12 勤務機関

へ支援を行っており（図 13）、おおよその経験症例数でみると“10 例以上”が 55%で最多であった（図 14）。

セミナーの内容については、テーマ、講演内容、総合討論、WEB 形式での開催いずれも「大変良かった」と「良かった」をあわせて 90%以上となった（図 15）。

自由記述にて今後の企画についても収取しており、その結果は表 3 に示した。

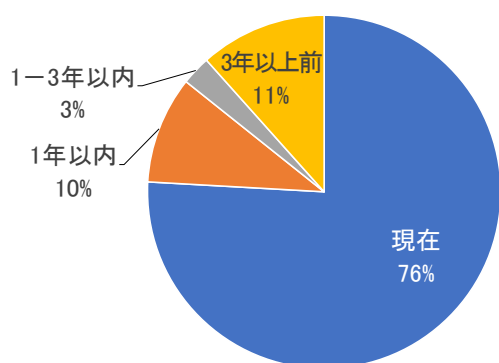


図 13 支援の現状

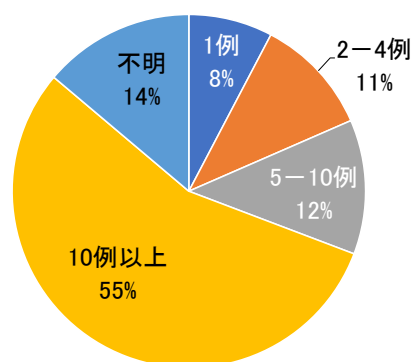


図 14 経験症例数

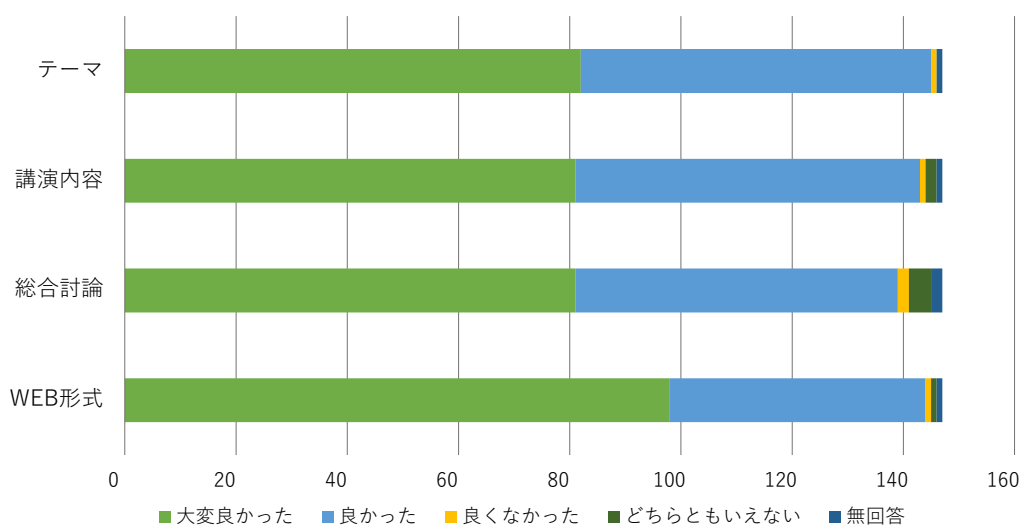


図 15 シンポジウムの評価

表 3 今後の企画についての自由記載

今後の企画の希望
看護師－MSW－心理師との協働で支援された症例報告等を希望
HANDに関して学びたい。就労に関して医師と意見の相違がある
就労支援・治療と仕事の両立など
HIV診療に携わる機会が少ない方を巻き込んだ企画
可能な範囲で当事者の方のお話を聞いてみたい。私たちの関わりがどのように受け取られているのか気になる。
本人が開示したくない場合で、介護や障害福祉サービスなどを利用する必要が出たとき関係者との情報共有や関係構築、本人の気持ちサポートなどについての実践

D. 考察

参加者の約9割は医療機関に所属し、現在もHIV陽性者の支援に携わっていた。MSWと心理職ともに参加がみられ、担当症例数において幅広い担当症例数からの参加がみられた。

セミナー全体の評価についても9割ほどが良いと回答しており、参加者にとってMSWと心理職の協働を学ぶために有意義な会であったことが示唆された。

E. 結論

引き続き、HIV陽性者への支援として医療ソーシャルワーカーと心理職の協働に関するシンポジウムや研修会を開催していくことが必要と考えられる。

【研究Ⅰ・Ⅱ共通】

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

1. 宮本里香, 上村悠, 大金美和, 池田和子, 野崎宏枝, 佐々木愛美, 鈴木ひとみ, 杉野祐子, 谷口紅, 栗田あさみ, 大杉福子, 高橋昌也, 木村聡太, 近藤順子, 中本貴人, 高鍋雄亮, 丸岡豊, 湯永博之：HIV感染血友病患者の抜歯処置に関する課題の検討。第39回日本エイズ学会。2025年12月 熊本。
2. 上村悠, 大杉福子, 佐藤愛美, 野崎宏枝, 鈴木ひとみ, 大金美和, 木村聡太, 高橋昌也, 宮本里香, 中本貴人, 青木孝弘, 照屋勝治, 湯永博之：全国のHIV感染血友病等患者の薬害被害救済のために、ACC救済医療室で行っている活動。第39回日本エイズ学会。2025年12月 熊本。
3. 佐々木愛美, 大金美和, 野崎宏枝, 大杉福子, 鈴木ひとみ, 谷口紅, 大友健, 木村聡太, 宮本里香, 高橋昌也, 杉野祐子, 池田和子, 上村悠, 照屋勝治, 湯永博之：HIV感染血友病患者がアクセスしている健康情報等の内容と手段に関する実態調査(中間報告)。第39回日本エイズ学会。2025年12月 熊本。
4. 鈴木ひとみ, 池田和子, 谷口紅, 杉野祐子, 大杉福子, 佐々木愛美, 大金美和, 高橋昌也, 大

友健, 木村聡太, 宮本里香, 照屋勝治, 湯永博之：ACC通院中のHIV感染症高齢患者の居住地と医科併存疾患の通院先について。第39回日本エイズ学会。2025年12月 熊本。

5. 影森彩夏, 前田愛子, 嶋津佑乃, 井上桃花, 陳麻理, 大木悦子, 河原崎彩佳, 池田和子, 湯永博之, 青木孝弘, 照屋勝治, 小林瑞季, 木村聡太：HIV関連ニューモシスチス肺炎看護パスの運用の評価。第39回日本エイズ学会。2025年12月 熊本。
6. 三嶋一輝, 木村聡太, 高橋昌也, 北上早紀, 富永誠記, 高村佳幸, 葛田衣重：HIV感染症患者の療養支援に関する心理職とMSWの協働について～第1回心理職とMSWの協働シンポジウムのアンケート結果から～。第39回日本エイズ学会。2025年12月 熊本。
7. 木村聡太 (企画者・座長), 木村宏之 (座長)：シンポジウム14 チーム医療からみる“こころ”とはなにか。第39回日本エイズ学会。2025年12月 熊本。

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

引用文献：

藤澤美穂・小黒明日香・高橋文絵・高橋智幸 (2023). 本邦における“支援者支援”の実際関する文献検討. 岩手医科大学教養教育研究年報, 58, 63-73.